歴研おかやま
okayama history research society

第３３号
令和４(2022)年７月15日発行
会　員　募　集　中
年会費　　3,000 円
10月以降入会 1,500 円

令和４年度総会開催される

新たに楠敏明会長、中山幸子副会長、濱手英之事務局次長、内田武宏監事を選任

去る４月 29 日（金）、令和４年度総会が岡山県立図書館で開催され、36 名が出席した。濱手英之氏の司会で始まり、副会長で会長代行の楠敏明氏が議長になり、議事が進行した。

令和３年度事業報告が山田良三事務局長から、同決算報告が中山幸子会計から報告され、監事の那須丈平氏により監査報告がなされ、いずれも承認された。引き続き、令和４年度事業計画案が発表され、合わせて各事業委員会の活動方針が各事業委員長から報告された。さらに、令和４年度予算案が発表され、事業計画、予算案とも承認された。

役員改選では、改選案が事務局長から発表され、昨年度会長代行・副会長の楠敏明氏が正式に会長となり、副会長には山崎泰二氏、大河原喬氏とともに新たに女性代表として中山幸子氏が会計と兼務で就任した。事務局長は山田良三氏が留任、事務局次長には、諸事情から離任の申し出があった伊達

歴・研・展・望

私には3冊の座右の書がある。1つは勝海舟の「氷川清話」、1つは赤井電機工業社長、赤井三郎氏の「オレの軍歌」（兵役を体験し、戦後、赤井電機工業を起こした経営書）、1つは「大物になる本」（東北１番の長者になった織田大蔵氏の言動を今泉正顕氏がまとめた書）である。

なかでも「氷川清話」は折に触れ、困った時、自分を鼓舞する時、しばしば、手あたり次第読んでいる。

勝海舟は、西郷隆盛と談判して、江戸城を無血開城へ導いたことから西郷隆盛の度量を高く評価している。自分の経験談、処世術、人物評価、どれを読んでも毎回興味が尽きない。

中でも「知恵には尽きる時がある」「世の中は方針通りに行かず」「気合を制すること」「学者は実務にうとし」「寝学問」「坐忘」「すぐ頭に来るようではダメ」「家庭の事情が人間を弱くする」「仕事をあせるな」等々のくだりである。世間は生きている。理屈は死んでいると論破する。そして余裕を持てと。神武以来、誰が人材を育成してきたか、自省自習の工夫の他にないと説く。政治も外交も処世も子細工や屁理屈をつけず「正心誠意」あるのみと力説する。

一番身につまされるのは「時鳥　不如帰遂に蜀魂」（ほととぎす　ほととぎすついに　ほととぎす）という俳諧。少壮の時、いまぞと鳴く時鳥、やんぬるかな、帰郷するに如かずと鳴く不如帰、そして風前の灯の蜀魂。自分の人生を 17 文字で表現され、見透かされている気がしてならない。

（会長　楠　敏明）

教夫氏に代わって濱手英之氏が就任した。また、監事２人のうち、体調不良により離任の申し出があった永谷格夫氏に代わって内田武宏氏が選任された。運営委員として特別企画委員長を務めてきた高橋義雄氏には、５月 22 日開催の 10 周年記念講演会までは委員長の職務に責任を持っていただき、その後は顧問に就任してもらうことになった。

各委員会については、サロン委員長に板野忠司氏、ホームページ・オンライン委員長に雨坪寿則氏が就任､特別企画委員長は５月 22 日の 10 周年記念講演会の開催以降はしばらく空席とすることになった。その他の役職はこれまで通りということで承認された。

最後に、会則の一部を改定する案が提出され、会則別表の会員の規定に、「会費を二年以上滞納した者は本人に確認の上、退会者とする。」との一文を追加することが承認された。

議案審議終了後、第２部として、会員で語り部委員会の講師でもある高橋義雄氏による「日本の近代を創造した渋沢栄一と三島中洲の親交」と題する講演が行われた。

総会講演

「日本の近代を創造した渋沢栄一と三島中洲の親交」

運営委員（特別企画委員長）　*高橋　義雄氏*

総会終了後、高橋義雄氏による講演会が開催された。高橋氏は、日本の近代史、特に金融史や銀行史に造詣が深く、また、地元倉敷などに関係した人物史にも精通し、県内で数多くの講演を行ってきた方である。当日の講演はパワーポイントと配布資料を用いて行われ、丁寧にわかりやすく説明された。その概要は概ね以下のとおりである。

日本の資本主義の父と言われ、昨年の NHK 大河ドラマの主役でもあった渋沢栄一と、漢学の泰斗・明治の文宗と称される三島中洲には生涯にわたる親交があった。

栄一は天保 11 年（1840）武蔵国血洗村に出生、若くして尊皇攘夷運動に参加し倒幕を計画したが説得を受けて中止、江戸遊学時の知人で一橋慶喜の家臣平岡円四郎の支援で京へ行った後、元治元年（1864）に一橋家に仕官した。そして、興譲館の阪谷朗盧の支援を受け、一橋藩領であった井原で農民兵募集に成功した。

慶応２年（1866)､慶喜の実弟の一橋昭武のパリ万博行きに随員として同行し､パリでは銀行･合本（株

式）などの先進制度を貪欲に学んだ。明治元年に帰国後は大蔵省、第一国立銀行などで活躍し、多くの企業（約 500 社）や一橋大学ほか多数の大学の設立に尽力し、利益を福祉、教育、社会事業に向けた。福祉事業の父とも言われる。

大切なのは彼の思想である。栄一はフランスで「産業資本家は経済活動を通じて国富を増大させる」というサン・シモンの思想に大きな影響を受けた。帰国後はサン・シモン流の行動を実践し、フランスのような平等社会を目指すために尽力したのである。また、栄一は中洲の「義利合一説」を基に「経済と道徳の一致」を経営理念として普及に努め、「右手に論語、左手に算盤」を標語にして新進経営者を指導し、自身の講演内容を『論語と算盤』として著した。

三島中洲は天保元年（1830）今の倉敷市中島生まれで山田方谷の弟子であり、方谷の思想を学び実践を行動の規範とした。方谷は陽明学を旨とし、人は心の中に「良知」（善を知る心）を持っており、「良知」を致し物事を正すことにより、「治国平天下」が実現するとした。また、「誠」を陽明学の神髄として、「義と利」の思想を唱えた。方谷の弟子には他に川田甕江、河井継之助、熊田恰など多数がいた。

中洲は安政 3 年（1856）に備中松山藩に出仕、安政 5 年に昌平黌に入り、佐藤一斎に師事、その後、昌平黌や藩校有終館で教えた。万延元年には昌平黌で漢詩文を外山脩造に教えている。明治維新後、新政府の司法省に出仕、後には大審院判事になった。明治 10 年（1877）、判事を退任し東京麹町の自邸に漢学塾二松学舎を設立、翌年には塗炭の苦しみに陥っていた高梁に第八十六国立銀行を設立したが、準備中に栄一に手続きを相談、栄一のかつての部下の外山脩造を紹介してもらい円滑に設立できた。明治 29 年（1896）には東宮（後の大正天皇）侍講に就任した。大正 8 年（1919）に死去。

中洲は漢学の泰斗として、漢学の振興、発展に尽力し、陽明学の正統を守った。二松学舎の生徒としては、犬養毅、夏目漱石、中江兆民、平塚雷鳥、嘉納治五郎などがいた。また、吉田茂は二松学舎の第 4 代舎長であった。

中洲は「義利合一説」をとり、利を重んじるが義あっての利であり、利は義の結果だとした（「義は利の本なり」）。

外山脩造は長岡藩の出身で、河合継之助の学僕である。安政 6 年（1859）継之助は山田方谷に入門、「経世済民」を学ぶ。万延元年（1860）脩造は昌平黌に入学、三島中洲に漢詩文を学ぶ。河合継之助は新政府軍との戦いで負傷して臨終の際、「世のため、人のために尽くせ」との言葉を脩造に贈った。

明治に入り脩造は大蔵省に入省、銀行課に配属された。もと上司の栄一の指示により第八十六国立銀行の設立を指導。日本銀行大坂初代支店長を務め、辞任後に洋行して帰国後は大坂貯蓄銀行、大坂麦酒会社（現アサヒビール）、阪神電気鉄道などを設立。関西経済界の巨頭と言われたが大正 5 年（1916）に死去。

このような人間関係の中で、山田方谷の陽明学はその精神が三島中洲、渋沢栄一に継承され、日本の近代の発展に大きく資することになったのである。

（文責：井上知明）

歴研サロン・日曜サロン、順調に開催される

歴研サロン、日曜サロンについては、コロナ禍でたびたび延期されてきましたが、昨年秋以降は順調に開催されてきました。令和 3 年（2021）12 月以降、令和 4 年 4 月までに開催のサロンについて、その概要を掲載します。（場所はいずれも「ゆうあいセンター」）

「天孫降臨」の地を考察する（日曜サロン）

講師　井上知明氏（会員）

令和 3 年（2021）12 月 26 日、日曜サロンが開催され、井上知明氏による〈「天孫降臨」の地を考察する〉に 32 名が参加した。『古事記』、『日本書紀』の神話によると、天照大神の孫にあたる瓊瓊杵尊（ニニギノミコト）は、高天原から九州の高千穂に降臨し、地上世界の統治者となり、ニニギノミコトの子孫が天皇家に直結することになっている。

筆者は、高千穂の比定地については、一般的には観光地としての知識しかなかった。すなわち、宮崎県北部の高千穂神社のある高千穂町説と、宮崎県と鹿児島県の境の霧島神宮が鎮座する高千穂峰説である。しかし、いずれの説も、天孫降臨なんて科学的にはあり得ない神話なので、史実とは無縁の作り話と思っていた。ところが、井上講師の熱弁を聴いて、降臨場所については、筆者が思っていたのとは別の説があることを知った。また、記紀の記載において、降臨の命令主体、伴神の有無などに様々な異説があるのにも驚いた。

代表的な降臨場所の学説は、一つは記紀の「日向」とは、神武天皇の出発地の日向の国（宮崎県、鹿児島県の一部）とする説である。もう一つは、上田正昭氏や原田大六氏などの説で、北九州の「筑紫の日向の高千穂」であるという。井上講師もこの説である。その理由は、①『古事記』によると、天降ったニニギノミコトの言では「此の地は韓国に向かひ、笠紗の御前に真来通りて・・・」とあり、北九州の「筑紫の日向の高千穂」こそ朝鮮半島の韓国に向かっていること。②福岡県糸島市と福岡市との間の高祖山南東に日向峠、日向山という地名があること。③考古学的な考察（近隣に、日本一大きい鏡〈直径 46.5 センチメートルの内行花文八葉鏡〉が 5 面も出土した平原弥生遺跡、三種の神器のセットが出土した吉武高木遺跡〈発掘された巨大な建物はニニギノミコトの宮殿とも〉を始め弥生遺跡が多数存在すること）、などである。その上で、記紀に書いてあることを素直に解釈する限り、降臨地は北九州以外にあり得ないとの説明があった。また、高天原や天孫降臨の地、あるいは邪馬台国の比定などにおいて、単に地名の一致・類似だけでここに違いないと判断するのは問題があり、考古学のデータなど他の要素も十分勘案しながら慎重に検討すべきであるとのことであった。

井上講師によると、当然のことながら「天孫降臨」は、天から降りてきたのではなく、ニニギノミコトたちは海から（天は当然海）水平移動してきたと考えるべきであり、このことは『書紀』本文の記載から読み取れるとのこと。そう考えると、高天原は北九州沖に浮かぶ島（壱岐、対馬、沖ノ島など）か、又は朝鮮半島南部（後の伽耶付近か）の可能性があるとの説明を受けたとき、創作と思われた神話が少しずつ史実に近づいてきた。

参加者からは、記紀の編纂者が天照大神を権威づけるため神話化したことを理解した上で、天孫降臨の地と天照大神の父母（イザナギ・イザナミ命）を祀る神社との関連、北九州説に立った場合の鹿児島・宮崎の観光資源への影響や、神武天皇東征と邪馬台国東遷説との関係などについて、熱い質疑が交わされた。

講師は断定されなかったが、筆者は天孫降臨の地から、天皇家のルーツは朝鮮半島に関係ありと感じた。その後の秦氏、漢氏、百済人の亡命渡来などを考えるとき、20 万年前の大陸続きの時代のホモサピエンスはもとより、古代日本人の先祖は、天皇家をはじめ大陸にありと言えよう。参加者一同にとって、天孫降臨の神話を科学的・歴史的に考察する有益な機会となったことは、大きな成果であった。　　（板野忠司）

令和 4 年 1 月 30 日（日）

「吉備の古墳が物語る！　古代の心象と風景」（日曜サロン）

講師　和気誠二氏

コフニスト（古墳探究家、石室案内人）として知られ、自力で畑に古墳を作ったというほど古墳愛に満ちた方である和気誠二氏の講演に 31 名が参加した。パワーポイントを用いた講演で、和気氏が多数の古墳を踏査して到達された、考古学の通説とは異なる独自の見解が多数示された。以下に取り上げたもの以外にも、こうもり塚古墳、両宮山古墳、吉備中山古墳、箭田大塚古墳、鳶尾塚古墳、緑山古墳、宿寺山古墳、秦一丁坦古墳など、幅広く吉備の古墳群について、築造の年代、築造の特

徴、被葬者等当時の権力者や庶民との関係について言及された。

また、御自身が作成された「つわものどもの夢の舞台へ　古代吉備の栄華を掘りおこす旅」や、「古墳時代終末期と鬼ノ城」及び「楯築神社にある弧帯紋石の謎」などの資料も提供いただき、参加者一同が大変興味深く講演を拝聴した。以下に講演内容の概要を報告する。

自分は 2007 年の造山古墳を手始めにこれまで 2500 ほどの古墳を回り、古墳とその周辺の環境を観察することにより、技術的にどうやって古墳を作ったのかを考察してきた。なぜそのように作られたかについては、必ず理由がある。一般に、古墳はここに作るならこの大きさが一番適しているという大きさに作られている。古い古墳は山頂にあり、時代を経るとともに尾根に降りてきて、最後には平地に作られるようになった。

造山古墳も作山古墳も、元あった山を整形したものである。作山古墳は造山古墳より尾根の大きさが少し小さかったので、そのために大きさが造山より少し小さくなっただけであり、決して吉備の勢力が造山の時代より落ちたためではない。造山古墳は周濠がないとされてきたが、岡山大学の調査で深さ 20㎝の溝が発見された。しかし、水を貯めるためには深さ 1m 以上必要である。周濠とは言えないのではないか。

全長 8.5m の前方後円墳を自力で作ってみた。これまで、前方後円墳の造り出しの部分は祭祀を行った場所だとされてきた。作ってみてわかることだが、祭祀を行う場所は前方後円墳の前方部であり、造り出しの部分ではない。造り出しは掘った土を上にあげるための場所であり、古墳ができてしまえば必ずしも必要ない。だから造り出しのないものもある。

備中国分寺を中心にした吉備路風土記の丘の北側一帯に、県下屈指の大古墳群（6 世紀後半～ 7 世紀初頭）がある。その中では、こうもり塚古墳がよく知られているが、これらの古墳の横穴式石室は、石室の石組みの違いで大体年代がわかり、数十年間にわたる石室築造技術の変遷を見ることができる。前に作ったものより良いものを作りたいという、職人の思いの表れである。また、江崎古墳は石棺の幅が羨道の幅より広いが、石室中の石棺の位置が真ん中ではないことから、石棺を縦向きにして石室に入れた後で倒したのであろう。

総社市の鬼ノ城については、壬申の乱よりも後のものであり、通常言われているような朝鮮式山城ではない。鬼ノ城の頃の総社の中心は県立大学のあたりであり、防御のためならその前方に作るはず。後方の山に作っても意味がない。敵（唐、新羅）は西から来るので、防御のためなら西向きに作るはずだが、東に向いており、西が見えない。鬼ノ城は、百済からの難民のためにあの場所を提供して作られたのではないか。いわば、吉備における百済の分国のようなものであり、城壁は国境に相当する。祖国復興の夢の跡である。

楯築遺跡については、ストーンサークルとされる立っている石のうち、若すぎる石（黒くなってない綺麗な石）があるが、普通は雨ざらしになって 100 年も経てば真っ黒になる。また、作ったときに直立していても、1800 年間そのまま立っているということはない。これらは楯築が作られた時代のものではなく、立ったのは昭和に入ってからではないか。さらに、弧帯文石についても、石が綺麗であり、江戸時代に楯築神社ができた頃に御神体として作られたものではないか。（神社は大正期頃に朽ち果てたようだ。）

自分のような説を唱えるとロマンを壊してしまうということもあるが、自分は真実が何かということを何よりも重視している。どう思うかについては皆様の自由であり、このような考え方もあるということを御理解いただければ幸いである。

（井上知明）

令和４年２月 27 日（日）

「備中秦氏の謎に迫る」（日曜サロン）

講師　富久　豊氏（会員）

大和や吉備の古代史に詳しく、『日本書紀』などの歴史書にも精通している富久　豊氏が表記演題で講演され、35 名が出席した。『日本書紀』や『吉備郡誌』などの記述、備中秦氏と大和王権との関係、総社市の秦廃寺の創建者、新羅系氏族と百済系氏族との攻防、温羅伝説、秦古墳群の関係などから、備中秦氏の謎に迫る内容であった。終了後も活発な質疑応答があった。

講演の概要は以下のとおりである。

備中秦氏が記録に出てくるのは、『日本書紀』応神天皇 22 年９月条であり、吉備を訪れ「葉田（秦）の葦守（足守）宮」に滞在した天皇が、「織部を兄媛にお与えになった」との記事がある。この織部がいたところは、備前国邑久郡服部、

備中国賀夜郡服部、備後国品治郡服織ではないかと推測される。この織部が秦氏と関係があるのではないか。（ただし、『日本古代人名辞典』に登場する秦氏 1096 人のうち、備中に関係するのは秦人部の 2 人だけで非常に少ない。）

吉備に伝わる温羅伝説は、崇神天皇のとき吉備津彦命が派遣され、吉備のまつろわぬ者を平定したという話が後に脚色されたものである。表面上大和王権が吉備国を平定した武勇伝のように語られているが、もっと奥が深いのではないか。

『日本書紀』に、第 16 代仁徳天皇のとき、備中国川島河に人々を苦しめていた大きな蟇（みずち）がいて、笠臣の祖県守が退治した、そこで、その川の淵を県守の淵と言うのだという記事がある。この時に妖気が動いて、反逆者が現れたという。秦氏が渡来した頃、朝鮮半島南部では小国が次第に統合され、やがて新羅が加羅（加陽）を滅ぼして統一を果たす。それにより、これまで吉備国（備中）で実権を握っていた加陽一族が、大和王権との戦いの末、新羅系氏族（秦氏）に実権を明け渡す。これが蟇と県守の話であるように思う。つまり、加羅国は山（鉱物資源）と水田（穀物）の両方を失った。その秦氏も、蘇我氏と白猪史らの百済系氏族に実権を奪われてしまい、部民が中心の郷になってしまったのではないか。

他の文献にはないが、『吉備郡誌』には秦原寺が聖徳太子創建の 46 寺の一つとある。もしそうなら、建立には大和王権が関わっていたことになる。建立を命じたのは蘇我馬子ではないか。そして、蘇我氏の失脚とともに次第に見捨てられ、記録も失われたのではないだろうか。

備中秦氏の渡来実年代を推定するために、歴代天皇を 25 人ずつに分け、それぞれの合計在位期間を調べたところ、初代神武～ 25 代武烈天皇までの期間のみが 1166 年と異様に長い。これは『日本書紀』の作為であるとされており、他の期間は全部 300 年程度である。これを基準に補正すれば、秦氏が渡来した 15 代応神天皇の時代は 440 年頃になる。

『秦の郷史跡由緒集』の資料によると、秦の古墳群が築かれた年代が 3 世紀後半～ 7 世紀中盤までとなっている。備中の秦氏が推定実年代（西暦 450 年頃）に備中に来たとすれば、前半の古墳群には無関係であり、なおかつ大和王権と白猪史（後の葛井（ふじい）連）らの支配が始まった 6 世紀半ば以降は、秦氏の古墳への関わりは考えにくい。その間の 100 年ほどの間に、新参者の秦氏が力の象徴である古墳を作ることができたか疑問である。そうすると、秦の郷の古墳群を作ったのは加羅一族であり、被葬者は加羅国の有力者と、大和王権との度々の戦いに敗れた者たちではないかと思う。発掘品から鉄器が出てくるのは、秦氏と関係が少ないことを示している。なぜなら、備中秦氏の中に鉄の影が見えてこないからである。

以上の観点から、備中秦氏は機織りや農耕の技術を駆使して大和王権に仕える、部民の集団だったのではないかと思われる。それを政権中央にいた秦氏が伴造として管理していたのではないか。中世に至って伴造の管理から外れ、独立した集団となって勢力を拡大していったのではと思われるのである。　　（井上知明）

令和 4 年 3 月 22 日（火）

「吉備から古代の隣国東アジアを考える　好太王碑の示す史観」（歴研サロン）

講師　山崎泰二氏（副会長）

3 月 22 日（火）、当会副会長の山崎泰二氏による表記講演会が開催され、27 名の出席者があった。山崎氏は幅広い分野で吉備を中心にした歴史を探究しておられるが、特に、倭国と呼ばれていた古代の日本と朝鮮半島との交流関係や、日本への稲作の伝来と発展などに詳しい方である。以下に、当日の資料を中心に講演要旨を報告する。

古代吉備の歴史は『日本書紀』などの正史からは完全に抹殺されており、吉備風土記も存在しないが、考古資料や遺物などから欠史部分が判明しつつある。吉備はあまり自己主張せず、自分からは他国に争いを仕掛けていない。

弥生末期には日本最大の墳丘墓である楯築遺跡に当時の「長（おさ）」が埋葬され、特殊器台と特殊壺を用いた祭祀が行われていた。32kg の水銀朱は中国の不老長寿の薬の意味の他に道教思想で祭祀に用いたもので、「丘状の 5 つの巨石にも朱が付着し、埋葬者は女性のようだ」との近藤義郎先生の独り言を親友の薬師寺先生は聞き覚えているとのこと。その頃の列島の中心は吉備にあった。国立歴史民俗博物館名誉教授の春成秀卓爾先生は、吉備特有の祭祀が奈良纏向の箸墓古墳に象徴されるもので、卑弥呼の出身地が吉備地方であると論証されている。

縄文末期には倭族と表現される人たちが朝鮮半島に住んでいた。風俗は邪馬台国の倭人とほぼ同じで、文身をして言葉も通じ合っていたようだ。魏志韓伝では倭人伝と同じような表現になっている。そこに稲作が遼東半島などから朝鮮に伝搬してきた。そして、約 2500 年前の縄文末期に、半島の倭族の一部が新技術（水耕稲作）を持って九州北部に上陸した。稲は食材として優良であるが連作障害があり、水耕栽培することでそれを防ぐことができる。日本は水耕稲作の最適地であり、縄文末期に導入された水耕稲作文化が現在まで続いている。吉備の弥生末期の稲作生産は、

技術・量ともに突出していた。百間川から出土した「田植え」農法という当時としては抜群の技術によって、吉備が後に造山などの大古墳を築くような大勢力になったのではないか。岡山大学の景山名誉教授の実践によれば、1 粒の籾から 2500 ～ 4000 粒の収穫があるという。弥生社会は吉備で大きく開花したのである。

朝鮮半島の歴史に関しては、隣国を軽視した島国根性を排除し隣国を正しく知ることにより、友好を深めるだけでなく互いの安全を守り相互の発展に寄与できる。戦前の歴史教育は、「神功皇后の三韓征伐」に代表されるように皇国史観一色であったが、明治 17 年に当時の日本に都合の良い「好太王碑」が発見された。碑文には、倭国が 391 年に百済を、399 年には新羅までを攻め、高句麗の好太王が 400 年に倭国軍を破って新羅と百済を守ったとあり、三韓征伐とほぼ一致する内容に当時の指導者は喜んだことだろう。碑文については捏造説があったが、昭和 59 年に本物だと報道された。

現在では、記紀に記述されている神功皇后そのものが実在しない物語との認識が一般的になっている。ヤマト政権がその後百済に派兵するのは 200 年後の白村江の戦いであり、その時点の倭国にとって百済は友好国であった。仏教の伝来により日本列島にも新しい意識が生まれ、倭から日本への国名の変更も近隣諸国に認めさせることになったのである。

講演後には、講演内容に関することだけでなく、広くテーマを問わない活発な自由討論がなされた。邪馬台国、熊山遺跡、名古屋の日泰寺（タイ国王から贈られた釈迦の舎利がある）、古代の建造物の建築学的な考察など広範な話題についての議論があり、新しい学びを楽しむことができた。特に、出席されていた建築士の方から、建築学の視点からの熊山遺跡や鬼ノ城、古代の寺社建築の工法などに関する独自の見解を聞くことができたのは、有益であった。

（井上知明）

令和 4 年 4 月 3 日（日）

「備前松田氏史考」（日曜サロン）

講師　松田勝徳氏（玉松会会長）

参加者はコロナ禍にもかかわらず 43 名と多数。備前松田氏氏族会「玉松会」の会長である松田勝徳氏から、備前国の国司として備前金川城（玉松城）城主を務めた松田氏の一族の歴史について、計 15 枚にわたるレジュメと参考資料により、体系的かつ詳細な講演を賜った。

講師の松田勝徳氏は備前松田氏の末裔にあたり、備前松田氏が最終的に逃亡した四国丸亀の出身であるが、現在は神奈川県秦野市在住であり、岡山市北区金山寺での先祖（金川城主松田元成）の法要のために来岡されたのを機会に、中山亘岡山歴史研究会前副会長の紹介で講演が実現した。

講演内容は、全国 23 県にわたる松田氏一族の分布、各系統別のルーツ、家紋等の解説に続き、①備前松田氏は藤原秀郷の末裔で、波多野氏系譜につながる氏族であること、②承久の乱での功績により西遷した御家人など、鎌倉時代以降の松田氏の系図・年表解説、③建武元年（1334 年）松田盛朝が備前国守護就任、建武 3 年備前一宮社（吉備津彦神社）の松田権守在判の下知状の存在、室町時代から戦国時代にかけての備前松田氏の主力城 8 城（金川城、岡山城、徳倉城、虎倉城、西谷城、富山城、西菅野城、田益城）及び松田氏に従った 22 城等の当時の勢力の紹介、④応仁元年（1467 年）からの応仁の乱では東軍の赤松方につき、西軍の山名氏を追い落とした功績で伊福郷の守護代に就任、⑤岡山戦国時代の幕開けである文明 16 年（1484 年）松田元成が今度は逆に赤松氏を攻略した備前福岡合戦、永正 6 年（1509 年）松田元勝が備前金川城に「玉松」という城名を賜ったこと、天文 23 年（1554 年）毛利元就が松田氏の富山城を攻めるも撤退、⑥永禄 11 年（1568 年）備前金川城は、備前国守護代の浦上氏に従う宇喜多直家に攻められて落城し、備前松田氏滅ぶ・・・等々、年表に従い、備前松田氏の栄枯盛衰を解説された。この結果、講師の松田氏の先祖は備前から四国丸亀に逃亡したとのことである。

特に、東京大学史料編纂所榎原雅治教授が平成 12 年に作成された備前松田氏五流の系譜では、歴史学会で初めて備前松田氏の全体像が明らかにされたことや、現在もなお松田氏の研究が続いていること、備前松田氏と金山寺は親密な関係にあり、弾圧された備前法華の不受不施派の曼荼羅なども紹介されたこと、さらに女優の故八千草薫（本名松田瞳）も松田氏の末裔であったことなど、松田氏直系の講師が臨場感あふれる豊富な話題で語られ、会場は熱気に包まれた。

講演後は、活発な質問・意見交換があり、講師は乱世の戦いの主観的な評価はされず、淡々と史実に基づいて金川城が落城した松田氏最後に至るまでを丁寧に語られた。

（板野忠司）

日生湾「鶴島」クルージング＆ウオーキング

運営委員　*工藤　博*

令和 4（2022）年 3 月 15 日（日）、備前市日生において歴研としては初めての貸切り旅客船により、日生湾に浮かぶ「鶴島」への湾内クルージング＆ウオーキングを開催した。「鶴島」は明治 3（1870）年浦上四番崩れと呼ばれた長崎キリシタン 117 名が流刑、岡山藩預かりとなり、明治 6（1873）年禁制が廃止する迄開拓に従事し厳しい労働と迫害の中改宗を迫られ、この地で子どもを含む 18 名が最後を遂げた悲劇の島で、現在は定期船も通わぬゆかりの私有無人島ながら、特別に上陸させて頂き往時の歴史を偲んだ。

鶴島は平地の少ないほぼ岩場ばかりの島で、面積 0.1 ㎢、周囲 2.1㎞、標高 49m。当日は天候にも恵まれ、元歴研運営委員で備前市観光ボランティアガイド協会長の片山伸栄氏の案内で 33 名が参加、大生（タイセイ）汽船株式会社の「のりなはーれ」で日生港から出発、クルージング 30 分程で鶴島上陸、島内をウオーキングする。狭い島の登山道を島頂に向かって進む。

まず登山道の入口近くで、昭和 20（1945）年春、空中戦に遭遇し島に流れついた米国航空兵の遺体を弔う墓碑に手を合わす。登山道中腹には島民の命をつないだ井戸跡、また同時期キリシタン同様邪宗門とされて流されてきた日蓮宗不授不施派信徒の供養塔も見られる。島頂に登りキリシタン遺跡に会う。この地で亡くなった 18 名の石ころのみの墓が遠く長崎を向いた傾斜地に並んでいる。白い小さなマリア像が建てられ 12 名の名前を書いた墓碑がある。6 才、8 才、9 才が含まれ憐れである。

再び船に乗り大多府島の一文字波止、見付島のニセ金造り洞窟、頭島のたぬき山展望台などをクルージングし、日生五味の市で下船、昼食。名物のカキオコに舌つづみ、新鮮な魚介類の買い求め等で楽しむ。

昼食後は我が国唯一の BIZEN 中南米美術館を訪ねる。同美術館は、ここにあるのが不思議とも思われる北はメキシコ、南はボリビアまでの 11 か国、紀元前 4 千年～ 16 世紀末に作られた 2300 点の土器や土偶、石器、織物など中南米の文化遺産が展示されている。丁度古代中南米土偶まつりが開催中で、森下館長による解説と古代アンデスの笛の音を拝聴し五感をくすぐる体験に接した。

岡山県人でありながらいまだ知らないことだらけの岡山の歴史、奥の深さをしみじみと感じる日生湾クルージング＆ウオーキングの一日だった。

美作地域の歴史と文化 津山郷土博物館

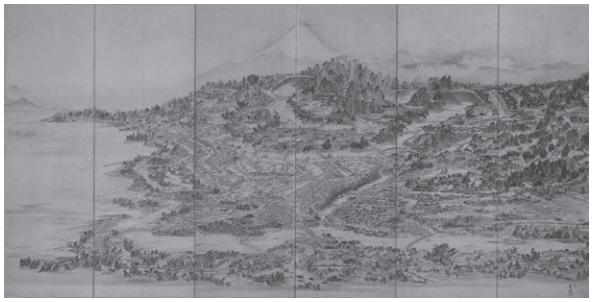
津山郷土博物館　学芸員　*梶村　明慶*

津山郷土博物館外観

津山市は岡山県の北東部に位置し都市と自然が融合した表情豊かな地域です。古くは美作国の国府・国分寺が置かれ、また、鎌倉・室町時代には美作国の守護所があったとされ、古代から近世にかけて美作国の政治・経済・文化の中心として栄えてきました。特に慶長 8 年（1603）に森忠政が美作国一円を領有し津山城が築かれると、その城下町として発展していくことになります。この津山の城下町は大きな戦禍に見舞われなかったこともあり、近世から近代にかけての建物や町割りがよく残っています。現在､城の東側の城東地区、また、西側の城西地区が「重要伝統的建物群保存地区」に選定されています。

当館は津山城の南の麓にあり、建物は昭和初期に建てられた旧津山市庁舎が使用されています。この建物は昭和 4 年（1929）に旧城下町の津山町と周辺の 5 町村が合併し､市制が施行されたことを契機に昭和 8 年（1933）に新市庁舎として建設されたものです。外観はアールデコ様式で正面玄関ホールの主階段は大理石となっており、建物も見所の一つとなっています。

昭和 25 年（1950）に内閣総理大臣を務めた平沼騏一郎の別邸が平沼家から津山市へ寄贈され、その建物を郷土の歴史資料の収集・保存・研究の場として翌年に開館した「津山郷土館」が当館の前身になります。この時代、津山藩松平家時代の藩政文書、城下町の大年寄（町方の民政を担当）の文書、その他、津山藩士や村方の文書など多くの資料が収集され、現在でも研究資料の柱となっています。その後、昭和 57 年（1982）に、現在の新庁舎が建設されると旧庁舎が博物館として利用されることになり、昭和 63 年（1988）に津山郷土館から移転し､「津山郷土博物館」として開館することになりました。旧津山郷土館は現在「知新館」として市民の憩いの場となっています。



江戸一目図屏風

当館では郷土美作の歴史と文化を紹介する博物館として、地質時代から近現代まで通史的に展示をしています。主な展示資料としては、津山市内から発見された約 1500 万年前の奇獣パレオパラドキシアの骨格復元模型、古墳時代の美作地域を特徴づける陶棺、縮尺 150 分の 1 による津山城の精密復元模型などがあります。また、津山藩松平家のお抱え絵師である鍬形蕙斎が江戸の町を描いた鳥瞰図「江戸一目図屏風」は東京スカイツリーの展望台からの視点と同じということで、複製がスカイツリーの展望台に設置されたこともあり話題となっています。（通常は複製の展示）

アクセスマップ

春には桜で有名な鶴山公園（津山城跡）や昔の風情を残した町並みなど周辺には歴史と文化を感じさせるスポットが多くあります。こちらのスポットとあわせてぜひ美作の歴史と文化をお楽しみいただければ幸いです。

津山郷土博物館利用案内

〒 708-0022 津山市山下 92 番地
TEL （0868） 22-4567
FAX （0868） 23-9874
□ＨＰ　　http//www.tsu-haku.jp/
□開館時間　9:00 ～ 17:00（入館は 16:30 分まで）
□休館日　　月曜日　祝日の翌日　その他

岡山歴史研究会　十周年記念事業　終了御礼

岡山歴史研究会の十周年記念事業（記念誌発刊及び記念講演会）が無事終了いたしました。皆様のご支援とご協賛の賜物と感謝しております。

ご支援、ご協賛下さった方々のご芳名を掲載して、御礼に代えさせていただきます。

記念誌発刊協賛広告提供者一覧

企業・団体等広告

有限会社　防災システム　殿
有限会社　井上保険サービス　殿
株式会社　アートラック　殿
株式会社　花森商店　殿
有限会社　アクアテクノス　殿
シバムラグループ　殿
株式会社　土井　殿
梶田良雄法律事務所　殿
株式会社　三松　殿
総社市議会議員　難波正吾　様
ハースクラシック芳野　殿
有限会社　ナスインターナショナル　殿
ジュエリー田中　殿
武田整形外科医院　殿
吉備人出版　殿
三蟠鉄道研究会　様
郷土の歴史・経済・文化研究会　様
岡山歴史楽習塾　様
秦歴史遺産保存協議会　様
岡山人物銘々伝を語る会　様
備中佐井田城跡保存会　様
新見市大佐山田方谷記念館　様
高梁方谷会　様
高梁市山田方谷記念館　様

会員名刺広告

石井　保　会長	中山　亘　副会長	山崎泰二　副会長	雪吉政子　副会長
山田良三　事務局長	中山幸子　会計	富久　豊　運営委員	高橋義雄　運営委員
竹本弘子　会員	井上知明　運営委員	高野　広　会員	児玉　享　会員
大濵文男　会員	藤井義和　運営委員	板野忠司　運営委員	

記念誌発刊協賛寄付提供者一覧

マルセン財団　殿	伊藤　謙介　様	河本範義　様	
トヨタカローラ岡山　有元邦男　様		吉備システム(株)　殿	
(株)竹本商事運輸　殿	林眼科　林伸雄　様	大月洋志　様	清水成史　様
和仁　守　様	池田弘満　様	宮永雅人　様	中国銀行　広報室　殿
池ノ内英子　様	宮尾博躬　様	加原雅教　様	菱川克是　様
石田芽生　様	医療法人青木内科小児科医院　殿		若狭靖子　様
小橋　學　様	児玉　享　様	竹本弘子　様	西尾　浩　様
那須丈平　様	坪井　章　様	梶谷浩史　様	藤井義和　様
和田　豊　様	小嶋光信　様	結城順子　様	大田弘之　様
佐藤泰正　様	濱手英之　様		

十周年記念講演会協賛広告提供者一覧

岡山歴史研究会　会長　楠　敏明　様
トヨタカローラ岡山株式会社　殿
大河原農機株式会社　殿
医療法人青木内科小児科医院　殿
岡山歴史研究会　副会長　中山幸子　様
吉備システム株式会社　殿
武田整形外科医院　殿
有限会社　防災システム　殿

※記念講演会は本年 5 月 22 日に開催されました。詳細については、次号の会報 34 号で報告します。

岡山歴史研究会

会　長　楠　敏明

岡山歴史研究会

副会長　山崎　泰二

岡山歴史研究会

副会長　大河原　喬

岡山歴史研究会

副会長・会計　中山　幸子

岡山歴史研究会

監　事　那須　丈平

岡山歴史研究会

事務局次長　濱手　英之

秦歴史遺産保存協議会

和名抄『秦原郷』60 基を超える古墳群と出合う
３～４世紀の古墳群＝茶臼嶽・一丁坑・大坑古墳
古代寺社＝秦原廃寺・麻佐岐神社・石畳神社・姫社神社
古事記・日本書紀・新撰姓氏録の「秦氏・・・？」

会　長　板野　忠司

岡山歴史研究会

運営委員　井上　知明

今後の歴研行事の御案内

歴研サロン

・7 月 31 日（日）13：30 ～
　「戦術と古代史の謎解き」富岡博之氏
・8 月 21 日（日）13：30 ～
　「吉備の終末期古墳」総社市学習の館　高橋進一氏
・9 月 18 日（日）13：30 ～
　「日本原子物理学の父　仁科芳雄博士」田主裕一朗氏

会場はいずれも「ゆうあいセンター」です。通常毎月 1 回の開催を予定しています。

今年度から、歴研サロンと日曜サロンは歴研サロンとして統一されました。

参加申し込みは歴研サロン委員会まで
メール：rekiken.salon.ok@gmail.com、
ＦＡＸ：086-806-2525（山田事務局長）
電話は　長安登美枝 090-7130-2636、
板野忠司 090-7134-2709 まで
山田良三 090-1033-3327 でも可

探訪会・ウオーキング

・秋に岡山市方面へのウオーキングを開催予定です。
・秦氏ゆかりの地～京都の史跡巡り
　昨年来の企画ですが、コロナが収束次第再度企画いたします。

10 周年記念誌の訂正について

204 ページ、「山田方谷」の大河ドラマ化を目指す活動の本文 3 行目、1 万 5 千人分は 2 万 7 千人分の誤りでした。（山本元事務局長から御指摘いただきました。）

訃報

当会顧問として長年御指導いただいてきた芝村哲三氏が、本年 3 月に 96 歳で逝去されました。御冥福をお祈り申し上げます。

編集後記

今号には令和 4 年度総会の報告を掲載した。役員が改選され、楠敏明新会長のもと、新しい体制が発足した。総会の報告以外には、昨年 12 月から今年 4 月までに開催されたサロンやウオーキングの報告を掲載した。コロナ禍が一段落しつつある中で、歴研の各種事業もこれまで以上に充実してきているように思う。関係の皆様の御尽力には頭が下がる。

このほかに津山郷土博物館の紹介記事を掲載したが、この博物館には鍬形蕙斎の「江戸一目図屏風」がある。4 月半ば頃、久しぶりに JR 津山線に乗り、5 年ぶりに展示されたこの屏風の実物を見てきた。江戸時代後期に浮世絵師から津山藩の御用絵師になった蕙斎が、文化 6 年（1809）に描いた江戸の名所図で、江戸鳥瞰図の傑作である。

室町時代から江戸時代まで、京都とその周辺を描いた洛中洛外図屏風が多数作られた。最も有名なのは、狩野永徳が描き信長が謙信に贈ったことで知られる「上杉本」（国宝）であるが、岡山にも、池田家に伝わり今は林原美術館蔵の「池田本」（重要文化財）という江戸時代のきらびやかな優品がある。

「江戸一目図屏風」はこれらの洛中洛外図屏風とは異なり、彩色は地味で華やかさはないが、江戸城をはじめ浅草、隅田川、日本橋などの名所が多数描かれ、遠景に富士山もある。東京スカイツリー展望台からの視点に類似しているが、飛行機もドローンもない時代に、どのようにしてこの作品が描かれたのだろうか。

この屏風については会員で作家の平茂　寛氏が、東京スカイツリーに複製が展示されたのを契機に会報 5 号に紹介記事を書いておられる。また、この 5 月 14 日に放送された NHK 番組「ブラタモリ」には、資料として本図のコピーが登場していた。津山郷土博物館には複製が常時展示されているので、一見をお勧めしたい。　　（井上知明）

発　行　岡山歴史研究会
会　長　楠　敏明
編集長　井上知明
事務局　〒701-0204 岡山市南区大福415-14
山田　良三方
電　話 090-1033-3327（携帯電話）
ＦＡＸ 086-806-2525
メール rekiken.okayama@gmail.com
ホームページ http://b.okareki.net/